

## 普及活動実績概要報告書

## 目次

<u>〔課題 1〕</u>	担い手農家の経営安定 ～(有) D 経営体の水稲の生産安定化と軽労化支援～ 鳥取農業改良普及所 (総合支援)・・・	<u>ページ</u>
		<u>1-2</u>
<u>〔課題 2〕</u>	水田転作における白ねぎの生産安定化 ～異常気象に対応した生産技術の推進～ 八頭農業改良普及所 (野菜・花き)・・・	<u>3-4</u>
<u>〔課題 3〕</u>	農作業及び労働環境改善の推進 倉吉農業改良普及所 (総合支援)・・・	<u>5-6</u>
<u>〔課題 4〕</u>	琴浦梨生産部の新規就農者の育成確保 東伯農業改良普及所 (果樹)・・・	<u>7-10</u>
<u>〔課題 5〕</u>	健康な和子牛育成の支援 西部農業改良普及所 (畜産)・・・	<u>11-12</u>
<u>〔課題 6〕</u>	産地競争に打ち勝つ大山ブロッコリーの取組支援とスイートコーンの 品質向上取組支援 ～ブロッコリー産地振興への取組～ 西部農業改良普及所大山普及支所 (野菜・花き)・・・	<u>13-14</u>
<u>〔課題 7〕</u>	日野郡産米のグリーン・イノベーション 日野農業改良普及所 (作物)・・・	<u>15-16</u>

課題区分	総合支援課題
課題名	担い手農家の経営安定 ～(有) D 経営体の水稲の生産安定化と軽労化支援～ (2年目/3年計画)
普及対象	有限会社 D 経営体
普及活動の背景	<ul style="list-style-type: none"> <li>・D 経営体は、県東部平坦地の F 地域の担い手として H 4 年に法人化し、水稲主体の複合経営を行っている。会社は取締役 2 名、正社員 2 名及びパート 15 名で構成され、令和 6 年度は水稲 35.8ha、大豆 3.6ha、白ネギ 1ha 及びアスパラガス 0.2ha を栽培している。</li> <li>・D 経営体は長期にわたり安定経営を続けてきたが、令和 2～5 年の米価低迷や資材高騰が経営を直撃した。さらに、ベテラン水稲担当(取締役)の他界により十分な栽培技術継承も行えず、令和 5 年の平均反収(440kg)は、令和 2 年以前に比べて約 1 割減となっていた。このため、令和 2 年から毎年の赤字となり資産が急激に減少していた。</li> <li>・このような状況下で D 経営体から普及所に経営改善に向けた支援要請があり、経営の柱である水稲部門の収益性改善を行うため、担当者の栽培技術向上等による増収に向けた支援を行うこととなった。また、状況把握を行う中で、担当者の短期間での交代や作業面の課題(低い作業効率、農薬のナイアガラ散布等の重労働)も明らかとなり、併せて軽労化支援にも取り組んだ。</li> </ul>
普及活動の課題・目標	<p>&lt;課題&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・低収要因を把握するとともに増収に向けて、<u>担当者の栽培管理技術の向上</u>及び生育状況に応じた<u>適切な栽培管理</u>の実施が必要である。</li> <li>・従業員の定着を意識しながら、労働環境や従業員の配置における問題点を把握するとともに、軽労化等の改善に向けた社長の意識改革や<u>スマート農業</u>の取り組みが必要である。</li> </ul> <p>&lt;目標&gt; 令和 8 年度までに水稲の収量を 510kg/10a に増やす。</p>
普及活動内容	<p><b>1 低収要因の把握と改善策の実施支援 (R 6 年度)</b></p> <p>(1) R5 年産の状況を聞き取り、雑草の多発や不適切な栽培管理(中干し・穂肥・収穫等)が低収要因であると推察し、担当者へ以下の改善策の支援を実施した(4月から10月)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・雑草対策情報の提供(多発は場の特定)。</li> <li>・中干し時期の決定(調査ほ場の茎数データを提供)。</li> <li>・穂肥の時期と量の決定(幼穂長等を一緒に調査)。</li> <li>・収穫開始時の決定(成熟状況を一緒に確認)。</li> </ul> <p>(2) アグリノートの作業記録から日別・作業別別の作業実績一覧表を作成し、担当者と栽培管理項目毎に実績を評価して問題点、原因、改善策を検討した(11月)。</p> <p><b>2 担当者の栽培管理技術の向上に向けた支援 (R 6～7 年度)</b></p> <p>(1) R7 年の作付計画に合わせて、栽培管理スケジュールの作成を支援した(R6年3月)。</p> <p>(2) <u>指導農業士 G 氏</u>の協力を得て、①薬剤による効率的な畦草管理方法、②代かき時の田面の高低差直しを従業員3名に指導した(R7年4月)。<u>普及所は両者を繋ぐ調整役</u>を担った。</p> <p><b>3 労働環境や人員配置の改善に向けた検討及びスマート農業への取り組み支援 (R 6～7 年度)</b></p> <p>(1) R6 年の作業実績一覧表を使って、取締役1名と作業状況を評価し、問題点、原因及び改善策を検討した(R6年12月)。</p> <p>(2) スマート農業や効率的な栽培管理方法を学ぶため、県内先進水稲農家2件の視察を企画した。</p> <p>ア (株) H 経営体《気高町》<u>ドローン及びザルビオの活用事例</u>(11月)</p> <p>イ I 経営体《大山町》<u>大型ドローン T50 の活用事例</u>(12月)</p> <p>(3) 導入したザルビオの生育情報の精度を把握するため、6品種に調査ほ場を設置し、調査結果は当日中に取締役及び従業員全員に共有した。調査結果を基に追肥の有無や量を検討した(R7年)。</p> <p>(4) 取締役を対象に他の経営者との情報交換の場を提供した(普及所企画の法人研修会、R7年2月)。</p>
普及活動の成果	<p><b>1 適切な栽培管理の実施と収量目標の達成</b></p> <p>(1) R6 年の栽培管理項目及び労働環境の評価に基づき、改善策として野菜部門担当の水稲部門兼任、田植時期の前倒し、ドローン・ザルビオの導入などの改善が実施され、R7 年度は<u>計画どおりの適切な栽培管理が実施</u>できるようになった。</p> <p>(2) 適切な栽培管理、労働環境の改善等により大幅に増収し、反収は R6 : 514kg (目標 : 480kg)、R7 : 552kg (目標 490kg) と、<u>両年とも目標を超える収量を確保</u>した。</p> <p><b>2 水稲担当者の栽培管理技術の向上</b></p> <p>(1) 作業の目的や押さえるべきポイントを理解し、パート従業員にも指示できるようになった。</p> <p><b>3 労働環境の改善</b></p> <p>(1) 栽培管理技術の継承や猛暑の中での重労働(背負い式動力散布機による粉剤防除や追肥)の改</p>

善に向けて、スマート農業への取り組みを働きかけ、ドローン及びザルビオの導入につながった。  
 (2) 背負い式動力散布機による粉剤防除および追肥に比べて、ドローン散布では作業時間がそれぞれ1/2、1/3と大幅に短縮され、作業者の疲労度も劇的に小さくなった。  
 (3) ザルビオの活用では、生育ステージの把握により、適期の効率的な栽培管理につながった。

### 1 令和6年産水稻関連作業の評価結果(一部抜粋)

《評価基準》○:特に問題なく、現状のままでOK。 △:一部問題があり、改善の余地あり。 ×:問題があり、改善が必要。  
 ※問題:作業の遅れ、機体する効果が得られないなど

作業名	評価	△又は×とした理由	原因	改善策
代かき	△	・予定作業期間より大幅にオーバーした。 (制限要因)ドライブハローが1台。 作業可能者が1名、社長のみ。 →ドライブハローは2台にしても解決策にはならない。 ・サキドリ EW を散布したことで、作業計画に狂いが生じた。	・春耕転(雨による)の遅れにより秋耕転のみ実施した圃場の土が中々溶けなかったため。 ・サキドリ EW 散布後1週間は代掻きできないことを知らなかったため、計画どおりできなかった。	・春耕転の早めからの実施。 ・1日の作業面積を1.4haに減らす。 →田植えの終了時期が6/20まで遅くなる。R6年産より1週間の延長。 ・マニュアル化。(ユーチューブのURLをリスト化) ・サキドリEWを散布しない。
畦草刈	×	7月～8月の手刈り不実施。	人員不足や優先度の高い作業とバッティングしたために後に回されざるをえなかった。	夏作業の見直し、人員補充。
穂肥	△	穂肥時に色ムラが見えた。	穂肥実行者による散布ムラ。	・ほ場毎の葉色の見極めと慣れ。 ・液肥の水口施用を検討 ・ドローン導入で追肥を検討(情報収集)。
防除	×	きぬむすめ、ハクトモチは急遽ヘリ防除を委託した。	稲刈と防除作業が同じ時期になり、人員が確保できなかった。	・ヘリ防除を委託する、もしくは、ドローンを導入し、液剤防除に変更する。 ・ドローン導入事例、性能等の情報収集。

### 2 指導農業者による現地指導(①効率的な畦草管理方法、②代かき時の田面の高低差直し方法)

日時:令和7年4月16日(月)午前8時～11時 場所:D経営体管理ほ場 指導対象者:D経営体社員等3名

(1) 畦草管理 : カーメックス(土壌処理除草剤)とバスタ(茎葉処理除草剤)を使った畦草管理の方法のポイント。

#### <指導内容例>

- ・散布時期は稲の栽培期間中に長く効果を発揮させるため、できるだけ田植えの直前に散布(梅雨明け頃まで抑草)。
- ・草が伸び始めたら20cm程度になる前にモアで高めに刈る。3～4日後、刈草が枯れたタイミングでバスタを散布。
- ・散布箇所は水田の水際から60～80cm程度をまず先に、それより外側は2週間ぐらい遅らせて散布すると、作業時期がずれてローテーションが組みやすい。・水口の周辺にも散布しておくとも場所もわかりやすく、水管理の負担が軽減。

(2) 代かき時の高低差直し : D経営体のトラクター、ハローを使って実演指導。

#### <指導内容例>

- ・ハローのレーキは立てると土を引っ張りすぎるので、立てない。
- ・引っ張る土の量を少なめにしたい場合は、ハローの爪を回転させ、深めの設定で引く。

#### 《参加従業員の声》

- ・R6年は人員不足や優先度の高い作業とバッティングし、畦草刈が後回しになり、草が大きくなりすぎて効率が悪くなり悪循環だった。今年(R7)は先手先手で、畦草刈を効率化し、作業負担を軽減したい。
- ・代かき時の高低差直しはやったことがなく、作業方法もわからなかった。今後、たくさん作業をして経験を積みたい。

農業士の指導で  
ノウハウ伝授

具体的な  
データ・  
写真等



畦畔管理指導の様子



代かき時の高低差直し指導の様子

### 3 大型ドローン(DJI T50)を導入した感想

- ・背負い式動力散布機では丸1日かかっていた追肥作業が、ドローンでは2時間30分程度で終わる。また、ナイアガラホースによる防除作業は半日かかっていたが、ドローンでは2時間程度で終わり、大幅に作業時間が短縮された。
- ・体の疲労度がこれまでと比べものにならないほど少ない。また、農薬がかかることもなく安心できる。  
(去年までは肥料や農薬散布後は疲労度が大きく、作業後は次の作業に向かえない状態だった。)
- ・ドローンは作業負担が小さいため、肥料散布や農薬散布後も草刈りなど次の作業に向かうことができ、効率的である。
- ・ドローンは水張り面積が正確にわかり、肥料や農薬の散布量も自動計算してくれるのでコスト低減にもつながる。
- ・稲刈作業は葉に露がある間は作業が始められないが、ドローンを飛ばすと露を払うことができ早めに作業が始められる。

残された  
課題

- ・プール育苗に切替え、さらなる省力化を目指す。
- ・ザルビオの生育データを元に穂肥の可変施肥を全ほ場で実施する。

課題区分	特技課題（野菜・花き）
課題名	水田転作における白ねぎの生産安定化 ～異常気象に対応した生産技術の推進～（2年目／3年計画）
普及対象	八頭郡内白ねぎ生産者49名（14ha） （重点農家5名）
普及活動の背景	<p>1 近年の白ねぎ生産では、猛暑や大雨などの異常気象による欠株の発生や生育停滞が見られ、収量の低下、計画的な収穫出荷が難しくなっている。</p> <p>2 水田転作の白ねぎ栽培では、排水性が悪く収量低減の要因となることから、ほ場ごとの土壌特性を把握し排水対策を実施することが重要となるが、対策未実施あるいは不十分な生産者が多い。</p> <p>3 排水対策とともに高温干ばつ時にかん水を実施すると収量向上に繋がるが、かん水装置の設置に手間がかかることや腐敗発生の懸念から、実施意向のある生産者は少ないのが現状である。</p> <p>4 水田転換の白ねぎの増収と土壌特性に応じた排水・かん水の指標を作成するため、令和4年から八頭町と鳥取大学との連携協議研究を開始し、八頭町内の白ねぎほ場の土壌特性の把握を行い、生産者自身が土壌や排水対策に関心を持つよう意識醸成を図る取組を進めている。</p>
普及活動の課題・目標	<p>1 安定生産に向けた技術支援</p> <p>（1）ほ場の特性把握と排水改善に向けた取組の支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・八頭町、鳥取大学と連携し、白ねぎほ場の土壌特性や排水性を把握し、白ねぎの収量向上を目指すことに加え、生産者自身がほ場の土壌特性や排水対策に関心を持つよう意識醸成を図る。</li> </ul> <p>（2）高温干ばつ時のかん水実施の推進と取組への支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夏場の高温干ばつにより、白ねぎが生育不良となり株が消失することを防ぐために、かん水の実施を推進し、高温干ばつ時のかん水実施戸数を増やす。</li> </ul>
普及活動内容	<p>1 安定生産に向けた技術支援</p> <p>（1）ほ場の特性把握と排水改善に向けた取組の支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・八頭町、鳥取大学と連携して、八頭町内の白ねぎほ場の土壌断面調査（写真1）および土壌水分状態のモニタリングを行った。調査ほ場の排水対策の処方箋を作成し、排水対策の実施を促した。</li> <li>・自身のほ場の土壌状態に興味を持ってもらうため、八頭町、鳥取大学と連携して調査結果をもとにした研修会（写真2）や白ねぎほ場での穴掘り研修会（写真3）を開催し意識醸成を図った。</li> </ul> <p>（2）高温干ばつ時の灌水実施の推進と取組への支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高温干ばつ時にレインガン（写真4、従来のスプリンクラーよりも広範囲に散水でき、移動が簡便な散水器具）による頭上かん水を実施する実証ほを設置し、調査結果を生産者および関係機関に共有した。</li> <li>・指導会等で調査結果（図1）をまとめた資料を配布するなどして、未実施の生産者に対してかん水実施を提案した。</li> </ul>
普及活動の成果	<p>1 安定生産に向けた技術支援</p> <p>（1）ほ場の特性把握と排水改善に向けた取組の支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・土壌断面調査や土壌水分モニタリングを実施することで、八頭町内の土壌特性を把握することができ、ほ場ごとの排水対策の提案をすることができた。排水対策の処方箋をもとに明渠（排水用の溝）を施工された生産者が見られるとともに、来年白ねぎを植えるほ場の土壌調査をしてほしいという声が聞かれるようになった。</li> <li>・令和6年度には、八頭町、鳥取大学連携研究の調査結果をもとにした土壌に関する座学研修を行い、生産者16名が出席した。令和7年度には、白ねぎほ場において実際に穴を掘り土壌について</li> </ul>

て学ぶ実地研修を行い、生産者3名が出席した。少しずつではあるが、白ねぎほ場の土壌状態について関心を高めることができた。

(2) 高温干ばつ時のかん水実施の推進と取組への支援

- ・令和6年度にはレインガンを用いたかん水を2戸の生産者が実施された。令和6年度の調査結果をまとめた資料を巡回指導会等で配布し、かん水の実施を促したところ、令和7年度には新たにレインガンによるかん水を1戸、かん水チューブによるかん水を1戸が開始された。令和8年度には新たにレインガンを6戸の生産者が導入する見込みである。

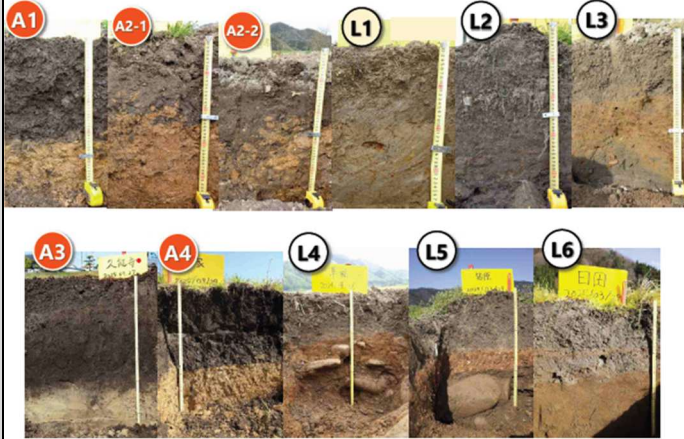


写真1 土壌断面調査ほ場一覧



写真2 座学研修の様子

具体的な  
データ・  
写真等



写真3 穴掘り研修の様子

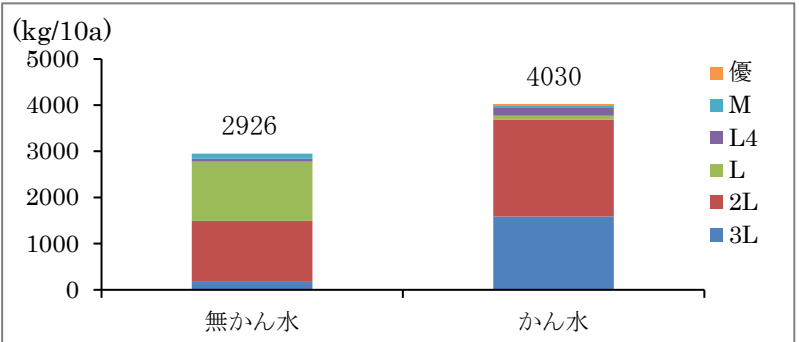


図1 かん水による増収効果 (令和6年度実証ほ結果)



写真4 実証ほで使用したレインガン

表1 かん水実施戸数

	実施戸数	レインガン 新規導入台数
令和5年	2	4 (令和5年以前も含む)
令和6年	2	0
令和7年	4	4
令和8年(見込み)	10	6

※実施戸数にはレインガン以外も含む

残された  
課題

1 安定生産に向けた技術支援

(1) ほ場の特性把握と排水改善に向けた取組の支援

- ・八頭町および鳥取大学連携研究で得られたデータをもとに、白ねぎの減収および増収要因を整理し、チェックリストの作成・活用を目指す。

(2) 高温干ばつ時のかん水実施の推進と取組への支援

- ・新たにかん水を実施する生産者への技術支援。
- ・排水性の悪いほ場でのかん水実証およびかん水技術のブラッシュアップ。
- ・かん水実施に伴い、雑草の発生が多くなるため、除草体系の確立が必要。

## 普及活動実績概要報告書

倉吉農業改良普及所

課題区分	総合支援課題
課題名	農作業及び労働環境改善の推進（2年目／3年計画）
普及対象	倉吉梨生産部（109戸）、東郷果実部（204戸）、倉吉市果実組合（12戸・23人） 倉吉西瓜生産部会（126戸）、重点対象：作業場改善支援農家（2戸）、農作業安全対象：全生産部
普及活動の背景	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鳥取県の主要特産品である梨は、高齢化や労働力不足により生産者数・栽培面積が減少。労働負担軽減策は経営継続、新規参入促進、産地維持に直結する。担い手確保のため省力化・作業改善の取組が必要である。</li> <li>・近年は農業関連の機械操作ミスによる事故の発生が後を絶たない一方、農作業時の熱中症リスクが高まり、令和7年6月から労働安全衛生規則改正により選果場等での体制整備・周知が義務化された。これに対応するため、選果場の実態把握及び改善策の検証が必要である。</li> <li>・農業者は日頃の作業で身体（運動器）に負担がかかっている方が多く、負担軽減のためにも、運動器疾患の知識の習得や予防対策の実施が必要である。</li> <li>・近年、生産資材の高騰が続いており、新規就農者はコスト削減のために様々な努力をしている一方で、離農者や既存の生産者の中には未利用となった生産資材の処分に困っている実態がある。</li> </ul>
普及活動の課題・目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 梨作業の省力化・効率化支援</li> <li>2 労働環境改善の支援</li> <li>3 農作業安全と体調管理の意識啓発</li> <li>4 不要となった道具・資材を新規就農者等次世代へ譲り渡す仕組みづくり</li> </ol>
普及活動内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 梨作業の省力化・効率化支援 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 初心者向け作業及び道具事例集の作成・普及 <ul style="list-style-type: none"> <li>・梨の初心者向け作業マニュアル作成のため、各種作業の優良事例（作業のコツ）を収集し、一部作業については動画を撮影した。</li> <li>・防除は、初心者むけに機械等の操作方法や注意点をまとめた動画を園芸試験場と連携して作成した。</li> <li>・大袋かけで使用されているパットケースについて、現行と廃版の作業性の比較を実施した。</li> </ul> </li> </ol> </li> <li>2 労働環境の改善 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 選果場の暑熱環境の実態把握及び改善提案 <ul style="list-style-type: none"> <li>・倉吉西瓜選果場及び東郷梨選果場、倉吉梨選果場の3か所で温湿度調査を実施し、調査結果をもとに各選果場へ改善提案を行った。</li> </ul> </li> <li>(2) 出荷調製作業改善支援 <ul style="list-style-type: none"> <li>・重点農家1戸のハウレンソウとストックの出荷調製作業改善の検討と改善効果調査を実施。</li> </ul> </li> </ol> </li> <li>3 農作業安全と体調管理の意識啓発 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 農作業安全 <ul style="list-style-type: none"> <li>・トラクター・管理機の安全啓発とともに熱中症対策研修を指導会等で実施し周知した。</li> </ul> </li> <li>(2) 体調管理の意識啓発 <ul style="list-style-type: none"> <li>・鳥取県の農業労働担当普及員及び鳥取大学医学部・鳥取県理学療法士会で構成するプロジェクトチームの活動として、農業従事者の運動器疾患を予防することを目的に取組する中で、畜産農家を対象とした取組を実施。</li> <li>・畜産農家（酪農・肉用牛）を対象に身体負担の実態のアンケートを実施。アンケート結果をもとに医師・理学療法士と連携し研修会を実施予定（2月）</li> </ul> </li> </ol> </li> <li>4 不要となった道具・資材を新規就農者等次世代へ譲り渡す仕組みづくり <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 道具・資材バトン市の試行 <ul style="list-style-type: none"> <li>・事例を収集、紹介する中で、ベテラン生産者は使用しなくなった道具の処分に困っていること（処分費用がかかる）、一方新規就農者はできるだけ初期投資を抑えたいので中古の道具・資材を譲ってもらいたいという実態があることがわかり、それら道具・資材をマッチングする仕組みを構築するため、園芸試験場で「道具・資材バトン市」として試行した。</li> </ul> </li> </ol> </li> </ol>
	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 梨作業の省力化・効率化支援 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 初心者向け作業及び道具事例集の作成・普及 <ul style="list-style-type: none"> <li>・花取り、開葯、交配、小袋掛け、大袋掛け、夏枝誘引の事例収集までが完了した。花取り、交配についてはベテラン農家の作業の動画をまとめ倉吉普及所インスタグラムで公開した。</li> </ul> </li> </ol> </li> </ol>

<p>普及活動 の成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防除は初心者むけにスピードスプレーヤーの操作方法や注意点をまとめた動画を作成し、新規就農者対象の研修会で公開。参加者は高い関心を示し農作業安全に対する意識が高まった。</li> <li>・大袋かけでは現行と廃版のパットケースに機能性、作業効率の差がないことが確認できた。</li> </ul> <p>2 労働環境の改善</p> <p>(1) 選果場の暑熱環境の実態把握及び改善提案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・選果場での調査結果とそれをもとにした改善提案を行った結果、倉吉西瓜選果場では令和8年度中のスポットクーラー導入が決定するなど熱中症対策の実施につながった。</li> </ul> <p>(2) 出荷調製作業改善支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハウレンソウ、ストックについて、出荷調製作業の省力化・効率化のためのレイアウトや作業工程を見直す改善提案をした結果、いずれも作業効率上がり改善につながった。実証農家からは「作業が滞らないようにという助言をもとに、工程を見直したことで、作業効率が上がることが実感できた。今後もこの視点で様々な改善をしていきたい」との声が聞かれた。</li> </ul> <p>3 農作業安全と体調管理の意識啓発</p> <p>(1) 農作業安全</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和7年度、研修会や各生産部指導会等において、トラクターや管理については計66人を対象に農作業安全研修を実施した。また、熱中症対策研修は計15回、計259人に対して座学や試着を実施した結果、対策の意識が向上するとともに、水冷服1着、ペルチェベスト5着の導入につながった。さらに、休憩をこまめにする、無理をしない等の対策を取り入れるなど、現場での熱中症対策が進んだ。</li> </ul> <p>(2) 体調管理の意識啓発</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・畜産農家を対象としたアンケートの結果、酪農家は下半身の負担が多く、肉牛農家は上半身の負担が多い傾向、畜産農家の身体負担の実態を把握することができた。また、多くの生産者が定期健康診断を受診していない実態が浮かび上がった。</li> </ul> <p>4 不要となった道具・資材を新規就農者等次世代へ譲り渡す仕組みづくり</p> <p>(1) 道具・資材バトン市の試行</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・バトン市試行にあたりマッチングの仕組みを構築した結果、12件の道具・資材のマッチングができた。バトン市当日にはマッチングブースは多くの関心を集め、新規就農者からは「初期投資がおさえられて大変ありがたい」「仕組を構築し継続してほしい」という意見が多く、リタイアした生産者からも「ゴミとして処分するにも費用がかかるので困っていた」「無償や有償で譲渡できることはありがたい」との感想が多かった。</li> </ul>
<p>具体的な データ・ 写真等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・梨事例集公開動画</li> </ul> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;"> <div style="text-align: center;">  <p>交配作業のコツ</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>交配時道具</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>摘果作業のコツ</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>小袋かけのコツ</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>小袋かけに使用する道具</p> </div> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・熱中症対策研修の様子↓</li> </ul> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;"> <div style="text-align: center;">  </div> <div style="text-align: center;">  <p>ペルチェベスト</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>水冷服</p> </div> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・熱中症対策資材（実際に体験してもらった資材）↓</li> </ul>
<p>残された 課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・梨作業動画は大袋掛け以降の編集・公開。</li> <li>・道具・資材のマッチングについては、インターネット上等で当事者同士で取引が完結でき、当事者以外の管理が不要な仕組みを構築する必要がある。</li> <li>・畜産農家を対象にした運動器疾患の実態把握とその予防方法、対策案をプロジェクトチームとの相談をもとに検討し、研修会を開催する。</li> </ul>

課題区分	特技課題（果樹）
課題名	琴浦梨生産部の新規就農者の育成確保及び園地継承支援（2年目／3年計画）
普及対象	琴浦梨生産部（123戸、58ha）、琴浦果樹同志会 18名
普及活動の背景	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成23年には東伯梨生産部と赤碕果実部が合併し、琴浦梨生産部（246名、130ha）が発足した。その後も生産者数や栽培面積は減少しつつあったが、平成30年に普及所が生産者を対象に梨栽培の今後についてアンケート調査を実施したところ、10年間で生産者数は80%減少、栽培面積は67%減少という厳しい将来予測となった（図1）。</li> <li>令和元年に「琴浦梨の将来を考える会」（生産部役員、同志会役員、JA・町・普及所：以下「考える会」と省略）が発足し、担い手の確保・育成、園地継承などについて検討してきた。</li> <li>令和に入ってから県内の各産地（野菜、果樹）で産地主体型の取り組みがスタート。梨については、近年全国的に高単価の傾向となり、果樹産地においても産地主体型で新規就農者確保の取り組みを進めるにあたっては追い風となっている。</li> </ul>
普及活動の課題・目標	<p><b>1 新規就農者の育成確保</b></p> <p>【課題】 新規就農者を確保する体制整備と新規就農者の確保</p> <p>【目標】 新規就農担当者の設置、毎年2名以上の新規就農者の確保</p> <p><b>2 既存園の園地継承を推進</b></p> <p>【課題】 園地評価方法の確立とマッチングの実施</p> <p>【目標】 毎年2件以上の継承を実現</p>
普及活動内容	<p>【令和2年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>考える会の取り組み支援 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 営農モデル作成、②情報発信・ケーブルテレビでPR、③ジョイント栽培の早期成園化実証</li> </ul> </li> </ul> <p>【令和3年～4年】 新型コロナの影響で考える会の活動が休止。</p> <p>【令和5年】 普及所からの働きかけにより考える会の活動が再開。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>考える会の取り組み支援 「琴浦梨バトン制度」の取組開始 <p>普及所から新規就農者が継承できる既存園の園地調査（点数評価）とリスト化を提案し、賛同を得る。生産者へのアンケート調査を実施し、貸出可能園を把握、園地調査と園地のリスト化を行った。新規就農希望者とマッチングを行い、新規就農者3名に3園の継承を実現した。</p> </li> </ul> <p>【令和6年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>考える会の取り組み支援 <p>普及所から生産部内に新規就農担当者の設置を提案し、5名の担当が配置された。琴浦梨バトン制度を支援し、4園（3戸）が新規就農者3名に効率良く継承された。産地主体型事業の実施に伴ない琴浦梨生産部が「産地将来ビジョン」を作成。生産部総会でビジョンを紹介、新規就農者の確保の取組が生産部内に周知された。</p> </li> <li>琴浦梨生産部新規就農担当の取り組み支援 <p>産地体験会（2回開催）やとっとり農業人フェアでの開催支援 東伯普及所管内の各産地の産地主体型の取組を紹介した</p> </li> </ul>

【令和7年】

・琴浦梨生産部新規就農担当の取り組み支援

産地体験会（2回開催）やとっとり農業人フェアへの出展に加え、新たに県外の農業人フェア出展、Instagram等のSNSの活用について提案した。

・考える会の取り組み支援

琴浦梨バトン制度の支援を継続し、アンケートによる園地貸出可能園調査の継続を働きかけた。他の産地主体型の取り組み事例を紹介し、産地主体型の活動強化を働きかけた。

- 1 生産者数と栽培面積数の減を食い止め（図1）、念願の10億円突破（令和7年）につながった
- ・平成30年のアンケート予想と比較して生産者数と栽培面積の減少を食い止めることができた。
  - ・令和7年は生産部発足して15周年となるが、過去最高となる販売額10億円を突破した。

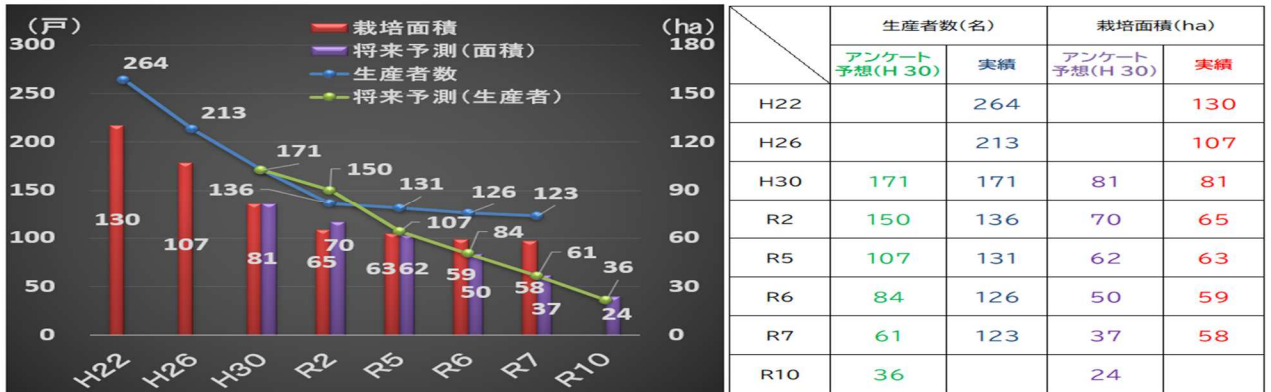


図1 生産者と栽培面積の推移（H30アンケート数値との比較）

2 将来を考える会、新規就農担当者会の活動が活発化した

表1 令和7年度 琴浦梨生産部 新規就農担当(5名)の活動実績(令和7年12月現在)

項目	期日	新規就農担当					備考
		A	B	C	D	E	
第1回 産地体験会(大袋)	6/15	○	○	○			・参加者2名(一般1名、農大関係1名)
大阪マイナビ農林水産FEST出展	6/28	○				○	・今年初出展 ・ブース訪問9組
第2回 産地体験会(収穫・選果場)	9/7		○			○	・参加者12名(一般8名、その他3名、農大関係1名)
ととりの農業体験ツアー	10/11			○			・参加者2名
とっとり農業人フェア出展	11/1	○				○	・R7新規就農(S氏)園案内 ・ブース訪問5名
新農業人フェア出展	11/9			○			・今年初出展 ・R7新規就農(S氏も参加) ・ブース訪問6組
鳥取県就農体験ツアー(JA全農ととりと(株)マイファーム)	11/23	○		○			・マイファーム社の「アグリノベーション」の卒業予定者11名を案内(C氏園他)
生産部紹介・PR動画		・R7年制作済					
Instagram		・R7年3月～発信中(92投稿)。フォロワー数768(R7.12.5現在)					

3 新規就農者が増加傾向となってきた

新規就農者数は、令和5年までの10年間で年平均1.4人だったが、令和6年は3人、令和7年は3人と増え、令和8年以降3名が就農予定となっている。

表2 新規就農者確保状況(H26～)

年度	就農区分			合計(人)	平均/年
	親元	独立(認定新規就農者)	独自		
H26-R5	10	3	1	14	1.4
R6	1	1	1	3	3
R7	2	1		3	3
R8(予定)	1		1	2	
R9(予定)		1		1	
R10(予定)	1			1	

普及活動  
の成果

4 琴浦梨バトン制度による園地継承の取り組みが生産部内に浸透した

表3 園地継承状況(R6-7)

年度	継承済		継承予定		合計	
	園地数 (件)	面積 (a)	園地数 (件)	面積 (a)	園地数 (件)	面積 (a)
R6	6	142	—		6	142
R7	2	33	2	20	4	53

令和7年のアンケートでは、新たに10戸が園地貸出可能と回答した



写真1 考える会の様子



写真2 新規就農担当の活躍（産地体験会）



写真3 新規就農担当の活躍（とっとり農業人フェア）



写真4 新規就農担当の活躍（Instagram）

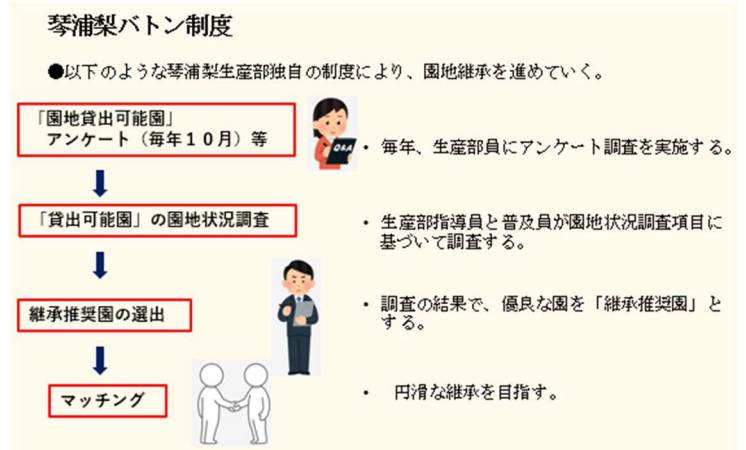


図2 琴浦梨バトン制度

【琴浦梨生産部】 東伯地区8園 赤碓地区5園  
貸出可能園MAP



具体的な  
データ・  
写真等

残された  
課題

- 今後も経営中止する高齢者が出ることが予想されるため、琴浦バトン制度を活用した園地継承を進めることで、産地の維持を図っていく必要がある。
- 新規就農者が就農後、早期に経営が安定するよう栽培指導や経営指導を支援する。



## 外部評価検討会 普及活動実績概要報告書

西部農業改良普及所

課題区分	特技課題（畜産）
課題名	健康な和子牛育成の支援 (2年目/3年計画)
普及対象	繁殖和牛農家33戸
普及活動の背景	・物価高に起因する牛肉消費の低迷、生産費高止まりから肥育農家の導入意欲が減退。全国的に和子牛価格は低下し、管内和牛生産の中心である繁殖経営に悪影響を及ぼしている。そうした中でも、発育良好な子牛のほうが高く取引される傾向にあり、日齢体重の向上が推奨されているが、配合飼料過多による弊害を懸念する声も多く聞かれ、単純な配合飼料増給ではない指導が求められている。繁殖和牛の盛んな地域として、健康で発育良好で過肥でない牛づくりを行い、斉一性を高めていくための取組が必要である。
普及活動の課題・目標	【課題】 昨年度、子牛発育改善意識啓発のため、飼養管理講習会を行い、知識の向上を図るとともに、和子牛せり会場での体高測定も始めることで、一層の意識啓発に努めてきた。また、重点農家には個々に検討を行い設定した飼養管理の改善状態の維持が行われているかの確認と効果検証が必要となっていた。 【目標】 セリ時日齢体重を指標とした子牛発育値の向上。
普及活動内容	(1) 子牛の発育性の調査 ・生産検査(4月、20戸、89頭、6月のべ、19戸、89頭、8月のべ、19戸、92頭)、販売検査(4月のべ、20戸、64頭、6月、20戸、89頭、8月のべ、17戸、85頭)に同行し、胸囲を測定、体重推定のための材料とし、発育値を推定、生育経過を可視化できるようにした。 ・発育向上意識啓発のため、セリ時の体高、胸囲測定を行った。 (4月44頭5月43頭6月33頭7月47頭8月37頭) (2) 課題抽出と確認 ・前年度設定した課題、生産検査時のビタミン給与(A氏・B氏)、子牛牛房の肺炎予防(C農場)の実施状況について巡回調査により確認を行った。
普及活動の成果	(1) 子牛の発育性の調査 生産者の中には、その場で推定体重を確認し、ビタミン剤投与目安とされるようになった。8月せり出荷時点で過去約9年分のセリ及び子牛検査時の発育データを解析したところ、季節の影響、温暖化と関係する年次の影響が検出され、関西畜産学会で発表した。 (2) 課題抽出と確認 A氏、B氏ともに、生産検査時のビタミン投与は継続、するとともに、A氏は消毒・冷房のためのミスト装置を設置し、取組のレベルを高めた。B氏は母牛へのアルファペレット給与を再開され、βカロテン補給に努められた。C農場については、前年代用乳給与量の増加速度を速めるとともに、今年度は肺炎対策として、牛舎換気の徹底、母牛免疫の移行についても配慮をされるようになった。その結果、A氏、B氏、C農場のいずれも、セリ時日齢体重に改善の傾向がみられている。

具体的な  
データ・  
写真等

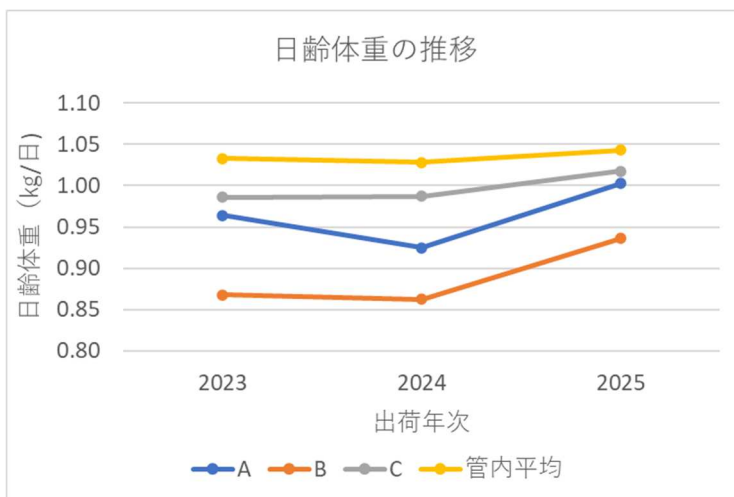


図1 セリ時日齢体重推移 (2025年10月現在)

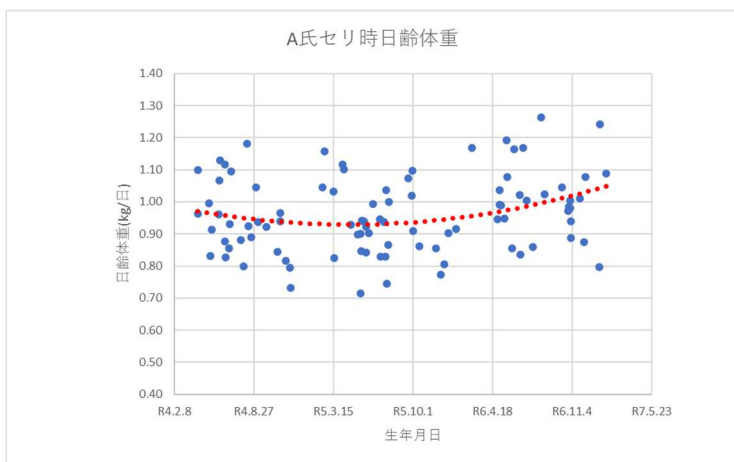


図2 A氏セリ時日齢体重

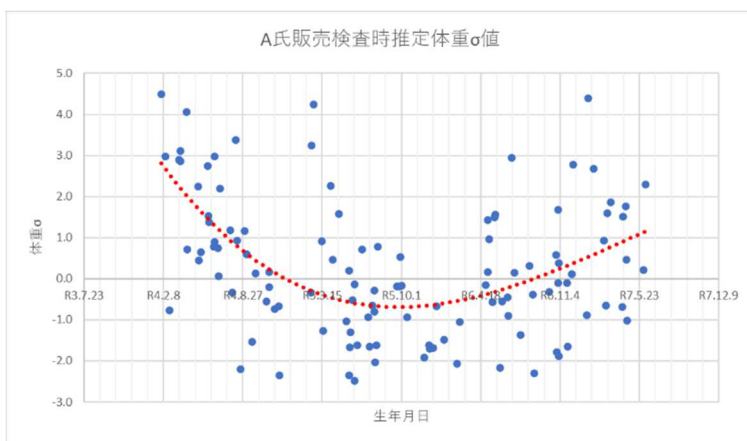


図3 A氏販売検査時の発育状況

残された  
課題

近年、夏季の暑熱環境が厳しさを増しており、暑熱対策の確実な実施が必要となっている。  
また、前述の暑熱の影響から、夏季の自給飼料作物栽培の課題が出てきており、飼料確保についての対策が必要となっている。  
併せて、貴重な新規就農者に対して、手厚い技術支援を行う必要がある。

課題区分	特技課題（野菜・花き）
課題名	産地競争に打ち勝つ大山ブロッコリーの取組支援とスイートコーンの品質向上取組支援 ～ブロッコリー産地振興への取組～ (2年目/3年計画)
普及対象	鳥取西部農協大山ブロッコリー部会(生産者 151名、417ha) 重点対象：ブロッコリー部会専門部
普及活動の背景	大山ブロッコリー部会は平成27年に販売額14億円を達成して以降、冷蔵庫の導入や共同集出荷施設の整備により収穫作業の改善が進んだ反面、生産者の減少、気象災害や病害虫の影響などにより販売額が伸び悩んでいる。このため、産地振興プラン『大山ブロッコリー®きらきらプラン～WIN-WIN-WIN!未来につながるブロッコリー産地～』を策定し、令和6年4月からプランの取組みを開始した。本プランではブロッコリーの「反収向上、単価アップ、生産力維持」を目標とし、その推進のため「6専門部」を立ち上げて活動を開始した。普及所は従来からの「技術課題」と、新たに6専門部の活動を支援する「担い手課題」を設定して課題解決を図ることとした。
普及活動の課題・目標	普及活動における産地振興プランの具体的な目標は反収向上(10aあたり140ケース(1ケース6kg)を150ケースへ)、単価アップ(10%アップ)により販売額14億円を目指す。この目標達成に向けて技術課題では反収向上のための普及活動の課題(施肥、病害虫、気象災害、雑草対策の各支援)を設定した。さらに、生産者の約半数が高齢化を理由に10年以内の引退を示唆(アンケート結果)したため新規栽培者の確保(年2名)を数値目標として支援する。 その他、品質安全管理、女性の活動支援、ブランド力強化活動など課題に対する支援も行う。
普及活動内容	<p><b>1 生産性向上に向けた技術支援【技術課題】</b></p> <p>(1) 施肥設計の見直し支援 過剰施肥によるブロッコリー茎の空洞化を抑えるため施肥体系の検討・改善を行う(土壌分析による町内土壌の基礎データの収集)。</p> <p>(2) 病害虫防除体系の確立 防除基準の改善(黒すす病防除体系の見直し)、生育ステージごとの防除管理(生物的・化学的防除)の実施、害虫対策(コナガなど)、農薬効果を反映させた「防除基準」の更新を行う。</p> <p>(3) 秋冬どり作型における気象災害対策 ①湿害対策：圃場均平化の実演会、排水口増設展示圃設置による湿害対策の意識向上。 ②猛暑対策：「ブロッコリー暑熱対策PT」の設置、育苗方法を見直した「育苗マニュアル」の作成と啓発、育苗時の定期巡回による適正管理の呼び掛け。</p> <p>(4) 除草剤の適正使用(新規) ブロッコリーの生育初期における効果的な除草剤使用の啓発(講習会、展示圃設置など)。</p> <p><b>2 生産部の活性化に向けた取組み支援【担い手課題】</b></p> <p>(1) 産地プラン専門部の活動支援 ①栽培技術企画部：除草剤試験、排水対策、栽培技術講習会の開催など。 ②品質安全管理部：作業場巡回、作業負担軽減の取組支援、農作業安全に向けた意識啓発。 ③新規就農サポート部：新規就農者の確保と受入れの検討など。 ④女性部：女性農業者のつながりの構築と活動の推進。 ⑤総務部：プラン活動の生産者への周知、収穫支援体制の構築支援、バトンタッチ制度の推進。 (⑥販売促進部はJA主体に支援)</p>
普及活動の成果	<p><b>1 生産性向上に向けた技術支援【技術課題】</b></p> <p>(1) 施肥設計の見直し支援 生産者自ら分析した土壌10点(全農委託)と普及所採取の90点(全農分析中)で得られた土壌基礎データを元に土壌別(水田・畑)の施肥体系を検討(施肥基準を細分化して過剰施肥を防ぐ)。</p> <p>(2) 病害虫防除体系の確立 防除体系を見直した結果、黒すす病の蔓延圃場が減少した。さらに害虫対策では生産者が薬剤の特性を把握して適期防除を行った結果、コナガなどの発生を抑えることができた。</p> <p>(3) 秋冬どり作型における気象災害対策 ①湿害対策：前年に湿害が甚発生した圃場の均平化工事を行った結果、本年は豪雨があっても湿害が軽減され、排水口増設圃場でも湿害発生が確認されず、排水効果が認められた。 ②猛暑対策：前年は夏季高温期の育苗で発芽失敗が多発したが、本年は「育苗マニュアル」に沿った管理が広がり育苗の失敗が減少した。</p> <p>(4) 除草剤の適正使用(新規) 前年まで産地全体で雑草が繁茂し栽培管理に支障が出ていたが、除草剤を使用する生産が</p>

増えた結果、雑草の問題が軽減した。

## 2 生産部の活性化に向けた取組み支援【担い手課題】

### (1) 産地プラン専門部の活動支援

- ①栽培技術企画部：技術課題の明確化と解決のため展示圃・実証圃による情報提供及び「ブロッコリー塾」で栽培技術が向上した。また、近年の異常気象に対応した「育苗マニュアル」を作成し生産者に提供できた。
- ②品質安全管理部：作業負担軽減のため「足元マット」を多くの生産者が導入した。また、作業場巡回の結果、工夫事例を収集でき衛生管理推進の意識も高まった。
- ③新規就農サポート部：県・町の就農相談会(2回)、産地体験会(2回)の活動や産地主体による新規就農者の受入体制の検討を行い、新たに2名を確保できた。
- ④女性部：先進地視察(1回)、研修会(1回)で女性農業者の交流促進を図り、女性視点による生産部活動への参画が見られた。
- ⑤総務部：各専門部の活動を定期的に情報発信できた。選別自動収穫機の実演試験を実施し生産者に紹介できた。ボタンタッチ制度(離農時の機械等の提供)の推進により9名を登録できた。
- ⑥販売促進部：消費者アンケートで販売の在り方などを検討。JGAPの認証団体が5から10団体に増加した(JGAP 団体認証移行の動きが出てきた。)

### 各専門部による活動の様子



写真1 圃場均平化作業の実演会



写真2 除草剤講習会 (ブロッコリー塾)



写真3 就農相談会の様子



写真4 作業場巡回



写真5 女性部先進地視察



写真6 選別自動収穫機実演会

具体的な  
データ・  
写真等

残された  
課題

- ・気象災害(干ばつ、豪雨、豪雪など)に左右されない栽培技術の確立
- ・各専門部に対する生産者の自発的な活動への転換
- ・生産者の新規就農者確保の理解と積極的な活動(産地振興に対する意識向上)

## 外部評価検討会 普及活動実績概要報告書

日野農業改良普及所

課題区分	特技課題（作物）
課題名	日野郡産米のグリーン・イノベーション (2年目/3年計画)
普及対象	管内水稻栽培農家、星空舞栽培農家 JA 特別栽培米グループ（奥大山プレミアム特別栽培米研究会（江府町）、日野特別栽培米研究会（日野郡全域、旧溝口町含む））
普及活動の背景	<p>1. 日野郡は昔から良食味米の産地として知られている。また、みどりの食料システム戦略の推進や高付加価値化を目的に、JA 特別栽培米グループ2組織を中心として農薬や化学肥料の使用を削減した特別栽培米の生産と販売が行われている。このような特色ある米づくりにより平坦部より割高の販売価格が維持されてきたが、肥料・燃油価格高騰の影響で特別栽培米の収益性は不安定であり、高齢化もあいまって農家の生産意欲の維持が難しい。</p> <p>2. また、日野郡でも近年は標高400m以下の地域で「コシヒカリ」の品質（玄米整粒率）が低下しており、土づくりや水管理等の高温対策技術の指導徹底が重要であるが、コロナ禍を契機として現地指導会がなくなり、JA 営農センターの組織改編もあって指導体制が弱体化している。</p>
普及活動の課題・目標	<p>1. 比較的高温に強く高収量が狙える「星空舞」の生産安定化と作付転換を進める。また、生育向上のため牛糞堆肥や鶏糞を活用した栽培や、元肥一発体系における追肥を試験する。</p> <p>2. JA 特別栽培米グループ2組織とも、食味重視により窒素肥料を控えた結果、反収が低迷し品質も低下しているため、収量・品質向上対策を推進する。また、省力化のため元肥一発肥料の活用や、全国規模の食味コンテスト入賞を目指して新品種「ゆうだい21」の試験も行う。</p> <p>3. 日野郡産米改良協会（各町（旧溝口町含む）、JA、全農、県で構成。事務局：JA 営農センター）と連携し、「日野川源流米コンテスト」の開催により管内主要品種のデータを収集・解析し、高温により増加するイネカメムシや紋枯病等の対策も含め、水稻栽培技術の指導体制強化を図る。</p>
普及活動内容	<p>1. 「星空舞」の生産安定化と作付転換の推進</p> <p>(1) 令和6年度まで「星空舞」では堆肥の利用が認められていなかったため、県星空舞ブランド化推進協議会の調査ほ場として、農試等と連携し堆肥活用の実証試験を行った（5ヶ所）。</p> <p>(2) 令和7年度まで「星空舞」では鶏糞の利用が認められていないため、令和5～7年度に西部地域研究会の調査ほ場として、鶏糞活用の実証試験を行った（2ヶ所）。</p> <p>(3) 高温等により元肥一発肥料の効果が早く切れる傾向にあり、現行暦の施肥量では足りないとの声もあるため、元肥一発の増肥体系についても検討を行った。また、それでも葉色が低下したため、追肥の効果についても併せて検証した（1ヶ所）。</p> <p>2. JA 特別栽培米グループの収量・品質向上等</p> <p>(1) 生育健全化により、収量向上と品質・食味値の維持が両立できることを実証するため、堆肥や鶏糞活用の実証試験を行った（2組織「コシヒカリ」「星空舞」「きぬむすめ」計3ヶ所）。</p> <p>(2) 日野特別栽培米研究会における収量向上や省力化を目指して、特別栽培用の元肥一発肥料（有機と化成を半々に混合）を活用した栽培試験を行った（「コシヒカリ」2ヶ所）。</p> <p>(3) 奥大山プレミアム特別栽培米研究会において「ゆうだい21」の試験栽培を支援した（7ヶ所）。また、同品種の食味向上とコンテスト入賞を目指して、視察研修を企画・開催した。</p> <p>3. 日野郡産米改良協会と連携した栽培指導体制の構築</p> <p>(1) JA 営農指導員との連携強化のため、SNS 活用した情報共有体制を構築した。また、各種生育調査の効率化と情報共有のため、普及所・JA・全農・肥料メーカー等で合同調査を行った。</p> <p>(2) 「日野川源流米コンテスト」の開催支援を通じて、出品米の品質・食味値データを収集・解析し、高温干ばつによる品質低下の進行を確認。これを元に、高温対策を盛り込んだJA栽培暦の改訂、技術指導資料の発行、栽培指導会の開催を支援した。</p> <p>(3) カメムシ・齧り取り調査を令和6年度は4回、令和7年度は2回、日野郡内（旧溝口町含む）で実施した。結果を速やかに取りまとめて共有し、各町防災無線等により防除を啓発した。</p>

1. 「星空舞」の生産安定化と作付転換の推進

(1) (2) 堆肥・鶏糞活用の実証ほでは、いずれも倒伏がほとんどなく、対照区と同等以上の収量が確保でき、目標収量・品質・食味値を達成できた(表1:実証1~9)。これにより、令和7年度から県全域の「星空舞」で堆肥施用が解禁となり、鶏糞も令和8年度から解禁予定。このことは、生産者だけでなく堆肥活用を推進する各町からも好評であり、堆肥の活用拡大に繋がった。

(3) 元肥一発肥料の施用量を3割(窒素2.2kg/10a)増やした結果、倒伏はなく、対照区と同等以上の収量が得られ、食味値・品質も概ね目標値を達成できた(表1:実証10)。また追肥により2割近く収量が増えた(表1:実証11)。これにより、JA鳥取西部管内では、高温対策としても、令和8年度から元肥一発肥料で葉色が低下した場合の追肥を推進する予定。

2. JA特別栽培米グループの収量・品質向上等

(1) 「星空舞」「きぬむすめ」は、堆肥・鶏糞活用により収量が安定し、特に令和6年度は過去最高収量となった。特に堆肥については生産者が生育・収量向上の効果を実感したため、令和7年度から奥大山プレミアム特別栽培米でも堆肥施用が解禁となった。

(2) 特別栽培用の元肥一発肥料は、「コシヒカリ」において現行施肥体系(有機肥料の分施)と比べて収量が6割向上し、品質も向上した(表2)。生産者及びJA担当者から高評価を得ており、令和9年度から日野特別栽培米研究会栽培暦への採用を目指している。

(3) 奥大山プレミアム特別栽培米研究会のほ場7ヶ所で生育調査を行い、「ゆうだい21」の栽培特性が把握できた。会員及び県内先進地(倉吉農業高校)のほ場を視察し、食味向上の栽培管理について情報交換を行った(写真1)。同研究会の出品米が全国コンテストで入賞し、令和8年度に向けて「ゆうだい21」の栽培・販売を拡大する方針である。産地品種銘柄登録も申請中である。

3. 日野郡産米改良協会と連携した栽培指導体制の構築

(1) SNS活用により、病害虫発生等について写真や地図付きで迅速に情報共有できた(写真2)。合同調査を通じて、経験の浅い営農指導員に調査法等を実地指導し、技術伝承にも繋がった。

(2) 令和7年度は高温対策に特化した栽培技術資料を発行した。水稻栽培講習会(座学、JA主催)の開催を支援し、管内で約60人の出席があった。また、令和7年度からJA栽培暦のカメムシ防除剤が強化され、令和8年度から無人ヘリ防除に紋枯病防除剤が加わる予定。

(3) 令和6年度は日野郡全域でイネカメムシの発生が確認されたが、防除徹底により、令和7年度はイネカメムシも含めたカメムシ類の被害が減少した。

表1. 星空舞調査結果

施肥体系	年次	区名	葉色 (SPAD) 穂肥II	倒伏程度 (0-4)	収量調査結果		品質・食味調査		備考
					精玄米重 (kg/10a)	対照比 (%)	整粒率 (%)	食味値 (水分補正)	
秋堆肥 +元肥一発	R6	実証1	33.8	0.0	681	109	83.2	76.0	
		実証2	31.7	0.3	645	103	75.7	89.6	
		対照	32.7	0.0	624		82.9	79.1	
秋堆肥+特裁	R6	実証3	31.7	0.0	669	-	79.8	88.9	
春堆肥 +元肥一発	R6	実証4	31.5	0.0	562		68.3	88.3	
		対照	30.2	0.0	513		67.8	87.7	
鶏糞 +元肥一発 (+追肥)	R6	実証5	31.6	1.0	688		85.2	83.5	
		対照	32.8	1.3	671		81.2	87.3	
		実証6	-	0.0	587	-	73.3	87.9	
R7	実証7	-	0.5	696	104	81.4	85.0		
	対照	-	1.0	671		81.2	87.3		
	実証8 (追肥なし)	27.3	0.0	712	129	70.2	87.9		
R7	実証9 (追肥あり)	30.8	0.0	653	119	71.2	87.9		
	対照	32.0	0.0	550		83.3	81.0		
	実証10 (追肥なし)	28.0	0.0	566	103	69.2	87.9	対照は鶏糞と同じ	
元肥一発増肥 (+追肥)	R7	実証11 (追肥あり)	29.4	0.0	664	121	69.4	85.9	
		県の目標値 (32以上)			500以上		70以上	80以上	

表2. 特別栽培用元肥一発肥料の試験結果(令和7年度「コシヒカリ」)

施肥体系	設置場所	区名	収量調査結果		品質・食味調査	
			精玄米重 (kg/10a)	対照比 (%)	整粒率 (%)	食味値 (水分補正)
鶏糞+特裁用元肥一発	江府町	実証1	642	160	68.2	80.7
鶏糞+有機分施	江府町	対照	401		61.0	81.7
特裁用元肥一発	日南町	実証2	465	-	81.4	82.5



写真1 (左): 「ゆうだい21」視察研修  
写真2 (右): SNSによる情報共有

令和7年度の日野郡産米は、収量・食味値は比較的良かったものの、高温干ばつや刈り遅れ等により特に江府町で品質(一等米比率)が低下した。令和8年度のJA栽培暦(星空舞、特別栽培米グループの栽培暦含む)の改定において、高温対策のための土壌改良剤の施用、元肥・穂肥量の適正化等を盛り込んだ。また、栽培暦に書ききれない情報(雑草対策、土づくり・ごま葉枯病対策、紋枯病対策等)は、JA及び西部・大山普及所と連携して別途技術資料を発行した。これらを元に、研修会や個別指導により引き続き日野郡産米の生産安定と収益性向上を図る。